

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和6(2024)年
5月号
通巻645号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和6年5月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷製本
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



交流の家の南側(現あすか駐車場)にあった神饌田で(右から)日聖法主・矢追鈴月さん・青山日元さんによる田植え風景

昭和45(1970)年4月23日 月次祭法話より

神ながらの道に沿って生きる

法主 矢追日聖(満57歳)

自然の中にある神ながらの
宗教

誠に良い時侯となつてまいりました。桜も散り今はツツジが満開でございます。こういうふうには自然は狂いなく毎年同じように巡ってくるのです。今朝も森下新藏さんが寄つて来られて、そういう話もおつたんです。

仏教とかキリスト教では、経典あるいはバイブルに従つて自分が修行し、また信仰していくことになっておりますが、神ながらの宗教というものには教祖とかありませんし、経典もありません。我々の生活している自然の中に経典以上のものが含まれている、それが神ながらの宗教なんです。日日我々は自然からいろんな事を教わっているんですが、それを自分自身で受け取るか受け取らないか、ここに神ながらの宗教の難しい一面があるんです。

自然の中にあるいろんなものから自分に合うように感じ取っていく。それを肌で感じてもらうのですし、知識で捉えてもよろしい。教える実体というものがない自然の中にあるということ、これが神ながらの宗教の最も大切な点だと思っております。私が毎月『すさのお』紙に書いておることを、いくら覚えてもらつても信仰の立場においては何の足しにもなりません。単に会話の話題が豊富になるというだけに過ぎないんです。神ながらの本当の意味とか「味」というものは、文字や

言葉で表現出来るようなものではありません。もう言いながら私は毎月書いておりますけれども、これは私の知識のなせるいたずらで、言わば趣味なんです。ですから信仰のために読んで覚える経典などは全然別のものです。

文字で書かれた仏教の経典やキリスト教のバイブルをどれだけ読んでいたところで、受け取る自分にその味を心の栄養にしていこうとか、悟っていくつもりがなければ、それは知識の遊具に過ぎないんです。いろんな難しい知識を持っているなど、他人からちよつと褒められるという程度であって、悟りでも何でもない。神ながら宗教の難しさは、こんなところにあるんです。

目の前の桜に真理がある

今ツツジが目の前に咲いています。4月になると咲き始めますが、これは決まりきっているんです。桜は葉桜になっている。これも決まっている。そして桜の隣にあるツツジとは同じ花でもあり、自然の恩恵に浴して春先に咲いているんです。どちらも花だけれどもツツジはツツジとしてあの色合いできれいに咲いておりますし、桜は桜として味を持って咲いている。ただそれを見ただけで、人生というものを直感で分かるはずなんです。

この間まで咲いておったこの桜が、この形になるまで30年の歳月を要しているんです。今見たあなたたちは「ああ大倭の桜はきれいになった」と、誰でも言うてくれます。私たちがここへ入った時は昭和22年ですけれども、今から勘定すればこの桜は20年あまりの齢を持っているわけです。

まだ今のような姿になっていない、あちらもこちら山であった時代に、ここに桜をそこに梅をツツジをと、選んで植えておいたのが、今咲いて

いる。清浄感というのか、すがすがしい生活環境を作るというのは非常に重要だと思つたのです。植えた当初においては、家もこんなにたくさん建つておりません。ほとんど山の中であつた頃から20年、30年の先を見越して、いろんなものを植えてあるんです。

今見れば美しいと思うけれども、20年あまりという歳月を経た後に今日の姿があるんです。毎年春がやって来ると桜の花が咲く。そしてわずか一週間足らずで散ってしまう。散ってしまった後には葉が出てくる。けれども、その葉は秋になると紅葉してこれも散ってしまう。来年の春のために芽を残して全部「骨」だけが変わってしまう。

本当に心で感じ取れる人がいたならば、仏教の経典を読まなくても、それを見ただけで瞬間に悟れるはずなんです。仏教の言わんとするところはつかめるはずなんです。それを知識で会得しようとしておれば、いつまで経つても解脱の域には達しない。

この世の中に何ひとつ心残りが無いように、人生の全てを喜びとして死んでいける自分を作っておかなければ、死後の世界において苦しまなければならぬ。死後の世界で苦しむと、自分の子とか孫とか、現界に残って生きている人たちの生活もまた苦しくなるし、悩みも多くなってくる。

経典を読んで、喜びをもって死んでいける心境になれる人は結構です。けれどもそんな漢字を並べたようなものを読んで分からなくても、今目の前にある桜の木の中にそれは一切含まれているというのを知って欲しい。それがいわゆる神ながらの宗教なんです。

知識で捉えられる人はそういうものから勉強した方が心強いように思われるでしょう。その人はその人なりに哲学として経典を読んでおられたら

よいのです。

でもそんな煩わしい事をしなくたって、今目の前にある一本の桜に真理が表れている。とはいへ、それも今申したように、それを見て自分で感じ取って、自分で悟れるだけの我が身のものがなければ、お経を百万陀羅読んでみても、あるいは桜が散っていく姿をどれだけ見ても、何ひとつ変わらぬんです。その点をよく知って欲しいと思うんです。

枝を折つたら痛いと思つ心

「般若心経は最も短いお経である。このお経を唱えたと功德がある。般若心経が一番結構なお経だ」と言っている人がたくさんおりますが、その人たちは仏教を信仰していて、唱えたらありがたいと思つている。

それはそれでよろしい。しかしそこには悟りはありません。結局、般若心経を唱えたら功德があるんやとか言うような人に限つて、経典の内容を分かっていると思つています。

般若心経は文字で、桜の木は生きた植物ですが、教えているのは同じことなんです。だから漢字を並べてあるお経を読んで悟れる人は、自分の目の前に立っている桜の木を見ても悟れるはずなんです。それをみんな考えて欲しい。

そういう点から神ながらの宗教には、文字を並べたような経典がないんですけれども、私たちの生活環境の中に神ながらの神の心、言い換えると自然から来る経典というものが遍満している。きつちり詰まつていて、その中に私たちが生きています。

春がやって来ると桜の芽が出て、4月には花が咲き、そして花が散つて葉が出て、秋になると葉

が散っていく。けれども「骨」になった桜の木の
中には、来年の春に咲く芽がちゃんと作られてい
る。その芽は春になると枝から出て花を咲かせ、
そして葉が出てくる。この繰り返しを般若心経は
言っているんです。五蘊皆空とか色即是空とか、
そんな難しいことを言わなくても、神ながらを分
かっておれば桜の花を見ただけでそれが分かるは
ずなんです。

空とはなんぞやとか、色と空のもうひとつ深い
空とか、そんな理屈の世界をこねまわしても人間
の悩みとか煩惱とかは消えない。それよりも、あ
の桜の枝を折った時に痛がるやろな、という心境
になって欲しい。

自然と人間が一体となる心境にまで到達すれ
ば、極楽があるなら死んで必ず極楽に行ける、と
いうことを経典は細かく書き並べてあるだけなん
だから、そうした意味であなたたちは文字で書い
た教えだけにとらわれてはいけません。

天地自然の心に沿う生き方とは

桜が咲いている隣にツツジが咲いている。これ、
どっちも仲良く咲いているんです。ツツジが桜を
見て、何で同じ花を咲かせんのやとけんかが始ま
ったらどうなるか。みんながただひとつの同じ花
になってしまったら、世の中というものは単調平
凡で仕方がないんです。

たったひとつの花があればいいものを、これだ
け種類の違った花があつて、そしてまた葉にし
ても、この4月が来たらそろって若葉や新芽を出し
ている。しかも桜の出した新芽を見ると、吉野桜
は緑色をしていますけれども、八重桜は茶褐色を
している。

同じ桜なら全て同じようにしといたらいいの

に、わざわざいろんな種類にこしらえている。こ
の自然が醸し出す微妙な宇宙の芸術と表現出来ま
すけれども、それを今朝も瑞光院の座敷に座って
眺めていました。

いったいこれは誰が作ったんだろう。誰の意思
によってこういうものが出来たんだろう。宇宙の
大祖神様、いわゆる宇宙の生命体が世界を多色彩
に作る。多色彩に作ることによって、みんなが調
和を取っていく。そこに美というものが表れる。
一人ひとりに個人差が生じるように、天地自然は
作られているんです。

1万人おつてもまったく同じ形の顔はないんで
す。背格好もみんな違って、性格も違って
いる。花と言ってもチューリップのような花から
桜のような花も、ツツジのような花もある。幾種
類の花があり、また香りにもいろいろある。甚
深微妙に出来ているこの造化の妙。これが宇宙の
仕組みというものです。

我々人間も自然の中から湧いて出てきた動物な
んです。しかし、勝手に出てきたわけではないん
です。この世に生み出したものがある。それは
宇宙の仕組みであり、天地自然の心なんです。自
然の心に自分自身が沿っていくような生活の在り
方が、一番尊い生き方だと思います。

自然の中から感じ取ったその姿や動き、いわゆ
る神ながらの大法というものをきっちりつつかん
で、自分自身の心の中に活かしていく。自分の人
生の中に映していく。そして周囲にも及ぼしてい
くことです。

人間一人ひとりに個人差があるように、桜でも
ツツジでもいろんな種類があるんです。全ての人
間に個人差を付けてある。これが天地自然の心で
す。そのような人間を天地自然の神様が作ってお
られるのに、自分の思惑を他人に押し付けてみた

り、あいつはけしからんとけんかを始めたたりすれ
ば、神ながらの大法に反逆する生き方になる。そ
ういうことを、あなたたちはよく考えて欲しいと
思うんです。

自分自身を知るといふこと

まず自分を自分で知ることからなんです。いつ
たい自分とは何だろうかと問うて、知ろうとする。
今目の前にある植物で言えば、ツツジはツツジと
して、桜は桜として、みんな自分の個性や特徴を
活かしながら、土にしっかりと根を下ろしている。
太陽の恵みとか水とか、いわゆる自然の恩恵によ
っておのおのが生きています。おのおのは生
きてはいるけれども、その隣にたくさん並んでい
る種類の違う植物とも、仲良く譲りあって調和を
取っている。

目の前にある自然の姿を、我々人間の社会に活
かすような心の持ち方をする。そうすれば仮に自
分がヒノキの場合、千年からの樹齢を保って高い
所から見下ろすような大木にもなれるだろうと思
うんです。

神ながらの宗教は、まず自分というものを知
ることが一番大事なのではないか。自分というもの
が自分で分からないから、甲斐性がないくせに他
人の事まで構いたくなくてけんかをするし調和を
欠く。

自然の姿を見たら非常に調和が取れています。
動物であろうと植物であろうと、みんな調和を取
っているのに、人類だけがいがみおたり争った
りする現象がなぜ出てくるんだろうか。それを他
人事ではなしに、自分の心に聞いてみたらいいと
思うんです。

私がこうして話をしていますけれども、一方通

行です。私が一方的に話をしていられるだけで、聞き手は聞いておいていいし、聞きたくない人は寝ておいてもよろしい。もし私の話を聞いて、何か心の中にひとつでもひらめきがあれば、それで結構です。あなたたちに教え込もうとしているわけではないんですよ。

ただ、神ながらの宗教とはどんなものなのかを、よく知って欲しいんです。神ながらの大法というのは、私が作った法ではありません。地球が出来る前から宇宙にある法則なんです。

その神ながらの法というものを自分なりに感じ取って、それに従うような生活の仕方をするのが神ながらの道。我々人間が法則を踏まえて実践する行いを「道」と言います。だから神ながらの法に基づいた生活の仕方というのは、神ながらの道を踏みしめて行くことなんです。

神ながらの道は、全てのものが調和を取って仲良くし、そして全てのものが幸せになるような生き方をしていく。何でもないことなんです。この何でもないことが、なかなか出来ない。いったい何事かと思う。

天地自然に溶け込んでいく

いっぺん自分の心を叩いて自分に問うて欲しいんです。ここは私の話を聞いて、あなたたちが大倭教の教えを知るだけの所じゃないんですよ。

あなたたちの心の中に天地自然の心、神ながらの法を呼び起こして欲しい。私の話を覚えるのではないんですよ。覚えてもらいたくない。私は主観をしゃべっているだけですからね。私の話によって、あなたたちの持っている何かを引き出されたら結構なんです。神ながらの法というのは、宇宙全体に最初から存在する厳然たる事実で真理

なんです。

特にこうした宗教として立つのは、神ながらの道を知ってもらおう場であるからなんです。けれども、知っただけで道を踏んで行くことは出来ない。自ら進んで実行しなくては、出来るようにならない問題なんです。私は音頭取りとして高い檜の上やぐらに立って太鼓を叩いているような形ではあるんですが、踊るのはあなたたち踊り子さんなんです。出しやばって音頭取りの私がしゃべっていますけれども、私の話をあなたたちが心で捉えて個人の心の中に活かし、生活の中や家族の中に反映していかなければ、信仰とは言えないと思うんです。ただ話を覚えているだけでは何にもならない。神ながらの道としてどのような生き方を選んだらいいのか。それをあなたたちは自身の心に訴えかけて欲しい。

神様に手を合わせている時の自分の心の動きは、山びこのように自分の心へ戻っているはずなんです。だから手を合わせると同時に、それを受けて出たものは自分の心の中へ帰ってきます。神ながらの道に沿っているかどうかの自己反省ですね。この点をみんなよく心得て欲しいんです。

本当の宗教というものは天地自然の心に、自身がりきる事なんです。天地自然全てが神さんなんです。その神さんの中に自分自身が溶け込む。これが本当の信仰なんです。そのような生活をしていなければ、神様にうそをついている。神ながらの道に反することになるんです。

調和を取り助け合う喜び

いろいろな姿形をしているけれど、全てのもが一体である宇宙の一番根元の生命体から出来ている以上、草木一本といえども、人間一人といえど

も、これはひとつなんだということです。根元までさかのぼれば、ひとつであるんだと。一番根元へ心を戻すことが信仰なんです。

草木も人間たちもお互い助けあっていく。相互扶助の心において仲良く助けあっていく。そして調和を取っていく。そういうような自分を自分で作るんです。神さんに頼んでしまおうのではなく、自分でするのです。そうして自分に与えられた天寿を全うしていく。

お互い笑いながら死んでいく。そういうような自分になろうという意欲によって、ここへあなたたちも集まって来ていると私は信じています。一日でも早くそのような心境になって欲しい。なっておったらここへ来る必要はないんですよ。ここであなたたちを見かけるといことは、まだその心境になっていないということですから、そのようなうとお互いに努めていく。

せめてこうして集まっている人たちだけでも人間関係の調和を取り助けあって、そしてお互いに喜び合いながら生活していくように心がける。

自分の生活の中において本当の極楽浄土とか、難しく言えば現世衆土建設の家庭を作っていく。そしてまた対人関係においても、出来るだけいざこざをなくして、互いに助けあって喜びの人生をみんなと共に送っていくという、そんな人間に自らなつて欲しい。それが大倭の神ながらの信仰の根元ではないかと私は思うのです。そのつもりでしたら信仰してください。

太陽は日本のものではない。空気は人類だけのものではない。対立闘争の心は自然の志に反逆する。「法主守言」より

じんずうりきによぜ

「神通力如是」の真意をさぐる

第三十回

大倭教の源流にさかのぼって

今回は天津皇祖と倭姫の神語りの後、靈界の日蓮が登場して切々と語りはじめます。

原文

十一月二十四日朝六時半、於鳥見庄山、太陽ヲ拝セル時。

天津皇祖。

「アサミドリ、雲ノ八重垣ワケ出デテ我が世ニ出ズル其ノ時ハ、八紘一宇ハ安ラケク、天ノ沼矛ノ立ツ時ゾ。」

君方代ハ千代ニハ千代ニ寿ギテ、我日本ノ大稜威、幾千歳ノ後マデモ寿ギ奉ル、幾千歳ノ後マデモ寿ギ奉ツラム。

千代ノタメシハカズカズアレド、皇稜威ハ永久ニ色マシテ、皇稜威ハ永久ニ、君ノヨハヒハ鶴亀ノイワフトナリテ千代八千代、八百萬ヨノ神等ガ挙リ挙リテ祝ヒ玉フ。ア、メデタキ極カナ」

十一月二十四日、午後十時半、於鳥見庄山、禊ノ終ツタ日。

倭姫、悪魔怨敵退散ノ御神樂。

「大八洲嶋、秋津島根ノ日本 我方皇孫ノ大稜威幾千歳ノ後マデモ、光ハ代代ニ

変ラジナ。題目。

大内山ノ松ノ緑ハ色マシテ、君ノヨハヒハ代代永久ニ幾千代マデモツツナリ。

ア、ア、ア、

「皇統連綿、万世一系、我日本ハメデタヤナ。八紘一宇ニ類ナキ、コノ有難キ日本ニ生ヲ享ケ、真ノ正法妙法トナヘル者ハ果報者ナルゾヨ。」

神宣ヒテ候、倭姫コノ有難キ大使命、イノチヲト(シ)テモ為シトゲ参ラセ候」

倭姫

「吾ガ使命、命ナゲ出シ行ク吾レハ、代々類ナキ果報者、ア、嬉ヤナ、有難タヤナ」倭姫挨拶。

十一月二十五日、午前七時半、於鳥見庄山、太陽ヲ拝セル時。

天津皇祖。

「大八洲嶋、豊葦原ノ中津国、我方日本ハ皇孫ノ治メル地デアルゾカシ、聖寿万歳、万々歳。

ワダノ原、ヤソ島カケルソノ光、八紘一宇ニ及ブナリ。我方皇孫ノ大稜威、幾

千歳ノ後マデモ、寿ギ奉ル」

同日、午前八時、内陣ニテ。

「吾レハ日蓮ナリ。

真ノ妙法題目ウケタサニ身延ノ山ヲ出テ候。アノ山ハ悪魔ハビコリ汚レ居リ候故、吾レ大倭鷄杜ニ来タレリ。吾レ妙法

伝ヘル時、真ノ妙法ヲ世ノ人々ニエトク出来ルヤウ申サネバナラヌ身ナレド其ノ願ヒ果シ得ズミマカリ候。何卒真ノ妙法ヲ世ノ人々ニ教ヘ候ヘ。今ハ末法ノ世ナルゾカシ(題目)。釈迦牟尼世尊、ワレ

末法ノ世ニ真ノ妙法説キ申サムト宣ハセラレ候ハ今此ノ時ナルゾヨ。日聖ヨ、吾レヨリ才願ヒ致ス才頼ミ申シ奉ルゾヨ。吾レ大倭日高見国鷄杜ニ参リ日日真ノ題目供養イタダキ此ノ上モナキ喜ビニ候。

ア、嬉シヤナ、吾ガ永年ノ思、今日ゾ果セル時ゾ来タリシガ、ア、ナゲカハシキハ僧共ノ心乱レシ、真ノ妙法、真ノ題目唱ヘル者一人モ無ク、斯クマデモ世ハ乱レシカ、ナゲカハシキ事ナリ。之レモ皆吾ガ罪、題目唱ヘサセル時真ノ正法妙法説カザル罪、之ノ罪真ノ題目ニヨリヌグイ玉ヘ、日蓮才頼ミ申ス」題目。

註 釈

①アサミドリ(浅緑)

薄い緑色。『福武古語辞典』による) 空色。『広辞苑』による)

今回の原本冒頭に「アサミドリ、雲ノ八重垣ワケ出デテ我ガ世ニ出ズル其ノ時ハ、八紘一字ハ安ラケク、天ノ沼矛ノ立ツ時ゾ」とあり、天津皇祖によるこの神語りは、昭和44年5月15日に宗教学人大倭教教務本庁によって発行された『加美のまにまに』の聖歌集の中の「あけぼの」の歌詞の冒頭の次の一節に非常に似ている点が注目される。

「あさみどり 雲の八重垣わけ出でて

われ世に生ずるそのときは

八百萬代の神だちが

集い来て大倭

天の沼矛のたつときぞ」

聖歌「あけぼの」は奇稻田姫によるお言葉であると法主が話されているのをお聞きしたことがあります。

②千代ノタメシハカズカズアレド

大稜威の力の偉大さを繰り返して表現されているが、稜威の時間の流れ方は電波のごとく一直線ではなく、「しめ縄の形のように」と法主からヒントを頂きました。(杉本)

③「禊ノ終ツタ日」について

これは神通力如是原文 「十一月二十四日朝10時半」の後にある一文だが、神通力如是を讀んでいただいている方には、唐突な感じがするかもしれない。

神通力如是原文の最初の前文に「矢追日聖御神託により昭和十六年十月三十日より同十一月五日まで鶏杜御神苑に於て妙法により真の禊

を行ふ」とあり「禊」という字は、ここまでのところほかに出ていないと思う。

私が大倭に入門したての頃に体験した靈動終ツタ日」と書かれてあるのかを考えてみた。

法主の真の禊は終わっていたのだから今回の「禊」にかかわる人は、憑依霊がかかる体質の妙月しかないと思われる。ではなぜこのようなタイミングで妙月の「禊の終わり」なのか。

これを考えていく為に、自分流に憑依霊を憑依者と言い換える(意味は同じ)。

神通力如是の内容は大半が憑依者が妙月の体を借りて自分の心を伝えている。ここに言う

「禊」とは現在意識の状態の妙月(つまり普通の人)の人間性を高めるため、妙月の自己本霊が、自分の体を使って(これを靈動とも言う)、現在意識にある心の歪みを修正してくれる精神的作業である。

この靈動が起きている時も、自分の現在意識ははっきりしていたことを覚えている。

靈動中の妙月も現在意識をもって、己の体に現れるいろいろな所作の意味を法主から教えられたのではないだろうか。学びの所作が身に付ければ靈動は終了。禊も終わる。(杉本)

④ワダノ原(海の原)

大海。うなばら。

(『福武古語辞典』による)

⑤ヤソ島(八十島)

多くの島々。

⑥カケル(翔る)

天空高く飛ぶ。速く走る。

(『福武古語辞典』による)

⑦日蓮(1222~1282・13)

鎌倉時代に法華宗(日蓮宗)を開いた僧。字

は蓮長。安房国小湊の海縁村落の「海人の子」として誕生。一二歳で故郷の天台寺院清澄寺にのぼり、一六歳のとき、「日本第一の智者」になるべく出家して是聖房蓮長と名のる。以後、

鎌倉・比叡山・南都・高野山などに修学した結果、仏法の神髄は「法華経」にあると悟って、一二五三(建長五) 法華宗を開示。念仏は無間地獄、禅は天魔の所為、律は国賊、真言宗は亡国とした「四箇格言」に示されるように、徹底した他宗批判を行った。「法華経」の採用を求め、六〇年(文応元) 幕府へ「立正安国論」を上呈。元寇を目前にした予言的言動により一定

の信者を得たが、幕府からはつねに弾圧され、波瀾のなかに身をおいた。七一年(文永八)の佐渡流罪と、その後の身延入山を通して仏使としての自覚を強める一方、現世と来世を超越した「法華経」の世界を思索した。

(山川出版『日本史人物辞典』による)

※原文の「アノ山ハ悪魔ハビコリ汚レ居リ候故」について、日聖法主の文章があるので参考までに紹介しておきたい。

《私が東京に居た頃であった。昭和十六年九月二十二日の夜だった。神拝していると思いがけない日蓮が現われて「至急に身延へ来てほしい。語りたいことがある」と言う。当時私は三十一歳、日蓮が郷里清澄山の旭森で本化の題目を朝日に向かって唱えた時が三十二歳、何か深い意味があると心得て、明くる二十三日身延へ単身で急行した。息を切らして西谷の御草庵跡へ走った。まず現状をまのあたりに見て驚いた。石の玉垣で囲ってあった中央の題目碑は取り除き、あたりは乱してあり、常経殿の建設中であ

った。前の谷川は昔の面影もなく、料理旅館の庭の如く石積みが始まって、見るも浅ましい僧侶の墮落を物語っていた。深夜ただ一人御草庵前の石垣に単座してゆつくり日蓮と対談したのである。老いやつれた日蓮は時々咳ながら最後に一言「身延は汚れた山なり」と言つて瞳をくもらせて立ち消えた。」(野草社『やわらぎの黙示』120～121頁)

⑧末法

濁り世。末の世。仏滅後、最初の千年(五百年ともいう)を正法、次の千年を像法、その後の一万年を末法という。この末法では、仏教はその教えのみがあつて、それを実践する行も、またさとりとしての証もない時代となる。末法には仏法が滅して救いがたい世となるという。すなわち法滅の世のこと。仏教の歴史観を示す語。日本では平安末期永承七年(一〇五二)に末法を迎えたとされた。

(東京書籍『広説佛教語大辞典』による)

現代語訳

11月24日 朝6時半、於鳥見庄山 太陽を拝せる時。

天津皇祖。

奇稲田姫「青空の中、雲となつて邪魔をする悪魔共の垣根をかき分けて、私が世に出てくるその時には全世界は安らかになり、世界の世直しが始まる時なのです。天皇の代はいついつまでもめでたく、私共日本の大いなる威光は何千年の後までもめでたく続きます。何千年の後までもめでたく続いていきます。

長い年月に禍福は『糾える縄の如し』ですが、天皇の御威光は永久に色増していき、その稜威は

永久です。天皇の齡は、長寿である鶴龜のように、またざざれ石が千年万年かけて巖となるように、いついつまでもつづぎ、数多の高級靈人の誰もかれもが集いきて祝つてくれます。

ああ、めでたい極みであります」

11月24日 午後10時半、於鳥見庄山において 禊の終つた日。

倭姫 悪魔怨敵退散の御神楽を舞う。

倭姫「多くの鳥々から成るトンボの形をした日本の私共(奇稲田姫につながる)天皇のご威光は何千年の後までも代々変わりはしません。題目。

皇居に育つ松の緑はあでやかさを増し、天皇の齡(スメラミコトの使命)は何千年も続きます。

あゝあゝあゝ」

奇稲田姫「皇統は絶えることなく続き、万世一系(令和5年5月号註釈①)。私共の日本はめでたいことです。世界に類のないこのありがたい日本に生をうけ、真の正法、妙法を唱える者は幸せな人です」

倭姫「奇稲田姫はこのように申されました。私倭姫はこの正法、妙法を唱えるための大使命を命をかけてやり遂げます」

倭姫(倭姫の身となつている妙月)「私の使命のため、命を投げ出しても行う私は、代々(「仏」過去・現在・未来)にわたつて類い無き幸せ者です。ああ嬉しいことです。ありがたいことです」倭姫(奇稲田姫に)挨拶。

11月25日 午前7時半 鳥見庄山において 太陽を拝せる時。

天津皇祖(奇稲田姫)「多くの鳥から成る、豊葦原の中津国(令和3年7月号註釈④)である私共の日本は、代々の皇孫(令和2年1月号註釈⑤)

が治める土地であります。天皇の寿命がいついつまでも続きますように、祈ります。

大海原の多くの鳥々を翔抜けるその御威光は全世界に及びます。私共の代々の天皇の御威光は幾千年の後までも続きますよう、お祝い申し上げます」

同日 午前8時、鳥見庄山の拝所にて。

日蓮「私は日蓮です。真の妙法題目を受けたばかりに、身延の山を出て来たのです。あの山は今では悪魔がはびこり、汚れているので、私は大倭鶏杜に來たのです。

私は妙法を伝える時に、真の妙法を世の人々に納得できるように話さなくてはならない立場だったので、その願いを果たすことが出来ずに、生を終えたのです。なにとぞ真の妙法を世の中の人々にお教えください。

今はまさに末法の時代です。題目。

お釈迦さまが『私は末法の時代に真の妙法を説きましよう』と申されたのは、今この時なのです。日聖よ、私からお願ひします。お頼み申し上げます。

私は大倭日高見国鶏杜にやつて来て日々真の題目供養をしていただき、この上もない喜びです。ああ嬉しいことです。私の永年の思いを今日こそ果たせる時が来たのですが、ああ嘆かわしいのは僧たちが心乱していることです。

真の妙法、真の題目を唱える者は一人もいません。これほどまでに世の中は乱れてしまったのでしょうか。嘆かわしいことです。

これも皆私の罪です。題目を唱える時に真の妙法を説き聞かせることなかつた罪です。この罪を題目によりぬぐい取ってください。

日蓮、お願いいたします」題目。

あじわい日記

4月7日 午前9時から大倭墓地の掃除が行われました。
 4月8日 午後2時から須佐緒祭が大倭大宮拝殿において行われ、この日は昭和48年4月8日の須佐緒祭の法話をお聞きしました。

法話の中では桜を植え始めた時の法主さんの思い出話を詳しく聞かせていただきました。
 今年の紫陽花邑の桜は丁度満開でした。邑の桜は法主さんが一本一本の苗木に心を込めて植えられた染井吉野や奈良の八重桜などですが、今は枝垂桜、八

重の枝垂桜も育っています。鏡池の側の躑躅も見事です。殿において大倭会主催観会が開かれました。
 4月15日 午後2時から大倭神宮の月次祭(箭負祭)が行われました。
 4月17日 宮崎県児湯郡の菊地洋一、敬子ご夫妻が元気なお姿で紫陽花邑に来られました。
 4月23日 午後2時から大倭大宮拝殿で月次祭が行われ、この日は昭和37年4月23日の法話をお聞きしました。
 午後4時から大倭会の役員会が開かれました。
 4月24日 午後5時から本紙

東光大祭 祖霊祭 祭典のご案内

令和6年8月18日(日曜日)・旧7月15日(日)

午前11時30分から、東方の碑で加美さまにご挨拶。

正午から、奥津齋庭において祖霊祭が行われます。

祖霊祭が終わり次第、拝殿に教長さんをお迎えして東光大祭が行われます。

祭典後、皆様各ご家庭の経木をお渡しします。

祖霊祭の間、拝殿では法主様の東光大祭でのご法話や紫陽花邑の記録映像等をご用意します。

【注意】 祖霊祭の経木への書き込み受付は

7月15日まで。日数に限りがありますので、お忘れのないようお願い致します。

『おやまと』の編集会議が教務本庁で開かれました。

5月1日 午前10時半ごろ長野県小県郡の柳井路子さんと大阪市の佐々木一也さんが来邑されました。以前から大倭神宮は何度か訪ねたが、今回初めて紫陽花邑に来られたとのこと。

5月4日 京都市の三宅淳之さんご一家が来邑されました。

5月5日 午前8時から大倭墓地の掃除が行われました。これから数ヶ月は暑い日が続くので8時からの作業になります。

5月6日 午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

午後6時半から大倭会館で邑倭の会が開かれました。

大倭安宿宛では

4月26日 午前10時半から久しぶりに集合形式で今年度第1回新入職員研修会を行いました。

大倭安宿宛の理念と職員としての基本的な心構えについての講義のあと諸規程についての説明がありました。昼からは、屋外からの各施設見学、その後紫陽花邑内も見学しました。

(菅原園)

4月16日 午後からコスメサークルを行い、ハンドクリームなどを使いマッソージを受けました。

4月28日 午後から会議室でプロジェクトを使用して映画会を行い、『名探偵コナン ハロウィンの花嫁』を上映しました。

(須加宮寮)

4月21日 奈良県障害者スポーツ大会(卓球)に4名が参加し、全員がメダルをもらいました。

4月23日 音楽療法を行い、曲に合わせて、鳴子を鳴らしたり、太鼓を叩いたりしました。

(長曾根寮)

4月8・9・13日(特養) 玄関前やベランダから花見を行いました。フロアでは桜の写真飾りを行いました。

4月23・25日(デイ) 作品づくり。今回はこいのぼりの壁掛け飾りでした。

(茂毛路園)

4月22日 美容容の日でした。月に1回、散髪屋さんに来ていただき、カットルームにて散髪を実施しました。本日は5名の入居者の方が散髪をしてもらいました。

(八重垣園)

4月18日 食堂にて4月生まれの方2名のお誕生会を開催し、皆でお祝いしました。

大倭会通信

令和6年度第1回役員会(幹事会)が、去る4月23日に大倭会館において出席者11名で開催されました。初めに各参加者から近況報告が語られた後、議事に入りました。

令和5年度会計報告、および令和6年度の事業計画と予算がくわしく説明され、いずれも満

場一致で承認されました。

▼幹事の岸野春子さんが帰幽され、新たに中村千久佐さんが幹事として選任されました。

▼令和6年度の一泊文化行事は10月20日(日)・21日(月)に木曽福島、飛騨高山、永平寺への中型バスでの旅を予定しているとの報告がありました。

▼秋の文化講演会は現在準備中で後日報告いたします。

▼観会や、その他大倭の行事への協力や参加は、昨年度通り実施する予定です。

※前号でお知らせした6月16日(日)の京都清水界限散策の日帰り文化行事への参加を歓迎します。集合等は前号8頁参照。

(問い合わせは080-2527-0840林修三まで)

あんない

*月次祭(大倭神宮) 6月6日(木) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催観会 6月9日(日) 午後2時より大倭拝殿にて。6月は12月とともに大祝の月です。

*月次祭(大倭神宮) 6月15日(土) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大倭大本宮) 6月23日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。